
ウルマを追う娘

うまほね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルマを追う娘

【Zコード】

Z8511T

【作者名】

うまほね

【あらすじ】

大陸ティニアーロッドには遙か昔から、黒きライオン獅子王ウルマの伝説が語り継がれてきた。貧しい村に住むリズは、人間の男よりも獸に魅力を感じてしまう少し変わった少女。ウルマに想いを馳せ、飢えに苦しむ生活を送る彼女のもとにある日一匹の猫が訪れたことから世界は一変する。近づいてはいけないと言わっている森で出会ったおかしいところだらけな青年と猫により、リズは様々な怪奇現象に巻き込まれてしまう。コメディとシリアルが混じりあつた、中世ヨーロッパ風ファンタジーです。西洋のモンスターが沢山出て

くの予定……です。

プロローグ

“ねえちゃん、またその本見てるの？そんなんだから恋人もできないんだよ”

“つるさいなー。いいじゃない、見るくらい。私の息抜きだもん。いい？もしかしたら将来アンタの義兄さんになるかもしれないんだからね？”

“やだよーーねえちゃんが言いつこしゃれになんないじやん！”

弟が私によこす眼差しが明らかにヘンテコなものを見やるソレだとしても、気にはしない。もう慣れっこだ。

だから負けじと言い返してやる。弟の小生意気な口を封じるため、眺めていた本のページをヤツに突きつけて。

本来ならば、私が口にしたセリフは「冗談だと笑い飛ばす類であるはずなのに、弟の顔面には笑みなど皆無。それどころか引いていた。

どうやらヤツは私が本気だと感じてゐるらしい。

気を取り直し、私は手元の本に視線を落とす。『ある動物』が描かれた本に。

そしてまた、別の日。

“ねえリズ聞いてくれる！？この前見かけた行商人がカツコよくてさあ……つて、聞いてんの？”

“え？ああ、立派な毛皮持つてたよね。まあ私が追い求めてる『彼の毛皮には到底かなわないけどね”

“いや何言ってんのあんた。誰が毛皮のランクの話してんの。そこまで毛皮に対してアツくなれんわ。っていうかなんかムカつくから、得意げに『ふふん』って笑うのやめてくれる！？ほんとにリズつてばいつもそう。もう十八だつてのにこれっぽっちも男に興味ないんだから。あんたが追ってるのはいつだつて”

村で数少ない友達の一人であるマリーが少し怒り調子で頬を膨らませる姿も、何度もこの目にしてきた。

“ライオンなんだから”

“うう。そうだ。

一度たりとも人間の男に、この胸を高鳴らせたことなんかない。

普通の女の子が抱くであろうドキドキを、私は人間の男に求める

「ひとまできなかつた。

もしあるとするなれば、それは……男ではなく、オス。

私の心を捕らえて離さない、唯一の存在。

ライオンだった。

どうしようもなく惹かれている。あの日からずっと。

そして

私は信じてる。

『ウルマ』の云々だ。

馬に恋つてんなといひうなの

「はあ、はあ……っ！」

極度の緊張感に息苦しさは増すばかりで、今はただ生き延びるこ
とだけが頭の中を占めた。

「待ちやがれ、その馬と荷物を置いてけつてんだよ……！」

「ついでに嬢ちゃんの白い肌も拝ませてくれるといいんだけどなあ

丁重にお断りしたい……！

なぜこんなことになつてゐるのか。何が起きてゐるのか。

单刀直入に言えば、今私は盜賊に追われている。

周囲は見渡す限り草原、遠田には山脈が連なつていて視界は緑で
埋め尽くされていた。太陽は大分と傾いているし、じきに日が暮れ
るだらう。

「俺達から逃げられると思つてんのかー…？」

逃げられると思ってなきゃやつてらんないだろがーー！

心中で悪態をつきつつ、必死に手綱を握る。私を乗せて走ってくれているのは、一頭の黒馬だった。この場で頼れるのはこの子だけだ。

ちらりと横目に後方を確認すれば、追つてくる賊は三人。下卑た笑みを張りつけている。キモチワルイ。ヤツらも馬を乗り回しているところをみると、恐らく今の私みたいに道行く商人や旅人を襲つて奪つたに違いない。

捕まつてたまるか！こんなところで終わるわけにはいかないのに。ぎりっと、下唇を噛む。

辺りには複数の馬の蹄が、土を蹴る音が響いていた。

私は馬を巧みに操ることなんてできない。乗るのだって、初めてだ。この揺れは恐怖でしかない。訳も分からず混乱するばかりで、ひたすら黒馬の背にしがみついていた。

お願い……お願い……私の命運はアナタにかかるてるの……！

「ひやつ、

もう強張つてしまつてガチガチになつている体が、ビクンと跳ねた。だつてアイツら、矢を放ってきたのだ。

幸いにも命中しなかつた矢は地面に落ちると硬い音をたて、転がつた。外した男が舌打ちするのも聞こえた。

おいおい小娘一人にボーガン使ひちゃうのかい？本気なんだね？本気と書いてマジだね？

冷たい汗が背を伝う。徐々にアイシラは距離を詰めてくる。

「アイラーーー！」

焦る。焦りに焦つた。どうするのどうしたらいいの。ダメだ、捕まつたら一巻の終わりだ。それなのに、私は黒馬の名を叫ぶことしかできない。だってわからない。賊に追われた経験なんて初体験だ。できればそんな体験はしたくなかったんだけど。

でも、それが良かつたのか何なのか。決死の思いが通じたのか。

黒馬　名をアイラーというこの子は、ぐんと足を速めた。

どんどん離れていく、賊と私の間隔。

すじ……この子、本当に駿足だ。夜明けからほぼ半日走り続けているのに、疲れをまったく感じさせない。速度が落ちることもない。なんて屈強な馬なんだろ。

振り返れば盗賊達も追いつけないと判断したのか忌々しそうにこちらを睨み、やがてくるりと方向転換し、引き返していった。

ほつと、安堵のため息をつく。未だに冷や汗は止まらず、手もじ

つとりと汗ばんでいた。アイラーの背に揺られ、私はまだ生きているだと実感する。

助かつた。

今になつて震えが私を襲い、どれほど自分が恐怖に駆られていたかが分かる。

日は沈み、すでに闇が降りてこよつとしていた。

もしかして……野宿しなきゃいけないの？つい先程あんな日にあつといて、野宿で。んも～神様つたらイ・ジ・ワ・ル！

とかそんな場合じやないんだよ。本当にこよつ、アイラーもそろそろ休ませてあげなきゃいけないし……。

大地を駆け続ける黒馬の^{たてがみ}鬚に田を落とし、途方に暮れていたときだつた。

ふと上げた視線のずっと先 空も地平線も夜の藍色に溶けようとしている中で、ゆらりと光が揺らいだのだ。

やがて現れたのは、重厚な外壁が止まるところを知らないように左右に延びて、かなりの広範囲を抱え込み、その中にひとつしりと構えた街並み。

「もしかして……着いた！？」

確信した。アレがそうに違いないと。

あの“彼”が住む、王都ノルファー・レンだ。

「うそ、やつた！アイラーやつたね……もう着いたのよ、信じられない。こんなコトつてある！？普通三回はかかるんだよ！？アナタの足は世界一ね！」

ついつい興奮してしまって矢継ぎ早に捲くし立てる、アイラーは少し速度を緩め、ぶるると嘶いた。ちなみにアイラーはオスだ。

ほんのちょっと、ちょっとだけアイラーと野宿してもいいかななんて思ったのは秘密である。だって彼は人間の男よりも頼りになるし逞しいし、私の命の恩人だしスタイル抜群だし非の打ち所がないじゃないか。

いや、しかし。しかしだ。幾らアイラーが男前とはいってもそこは、ね。やっぱり、ね。人間と馬という一線は引いとかないといけないじゃない？私もこれでも見てくれだけは、十八歳の婦女子ですからね。

誤った道を突き進みそうになる自分を制するのも、苦難である。人間より獸に惹かれてしまふなんて、大っぴらには言えない。

それに私には『ウルマ』という心に決めた御方が……つて！ウルマも獸じゃないか。その時点で変態道を突つ走つてしまっている。

一人で悶々しているうちに、もうノルファー・レンはすぐそこに迫

つ
て
い
た。

「ふわ～……」

す～い。とにかく、す～い。す～すきで感嘆の声しか出でこない。

一步足を踏み入れば、そこはもう別世界だった。

これがエスタリオン王国の王都、ノルファーレンか。大都市だつことは頭で理解してたはずだけども、『大都市』という単語だけが一人歩きして想像はとつてもあやふやなものだった。

だつて、自分自身が小さな村で育つてせいぜい近隣の町にしか足を運んだことのないんだもの。私にとつてはこの街は何もかもが刺激的で、魅力的だった。

とにかく活気がある。お祭りでもしてゐのかつてくらい。もうタクタクだというのに賑やかすぎて人が多すぎて、あちらこちらで会話が飛び交つていて、いちいち聞き耳を立ててちやこっちの体がもたないつてもんだ。

まず建物の造りからして田に見えて違う。大都市にもなると、レンガ造りが主流になるのだろうか。その数だつて半端じゃない。

道は入り組んでいて路地に入ればまた大通りに出て、終わりなんてあるのかつていうほどにどこまでも街は広がりをみせていた。あ

ちこちで見かけるお店だってそれぞれが扱う物の種類が豊富で、初めて田にするものばかりだ。

華やかに着飾つた人や厳めしい鎧を着込んだ騎士、馬車だつて通りを行き交う。世界中の人がここに集まつてゐんじやないかといつ錯覚すら、してしまいそうになる。

ああ、つい好奇心に引きずられそうになるけどそんな悠長にはしてられない。

「アイラー、ご主人様はどう？」

王都に入つてから私はアイラーの背を降りていたから、今は隣を歩く彼に尋ねてみた。

問い合わせても答えが返つてくるはずがないことくらいは、いくら私でもわかってる。そこまで末期じやないらしい。良かつた。手遅れになつてなくて良かつた。

じゃあなぜアイラーに不毛な質問を投げかけるのかつて、この子は私の馬じやないからだ。

アイラーは“彼”的使者だつた。

“彼”が自分のところへ私を連れてくるために遣わした、使者。“彼”と私を繋いでくれる唯一の接点。

私が王都まで旅してきた理由は“彼”に会つためなんだけど、私

は“彼”について何も知らない。たぶん貴族だりつていう推測だけ。

それに“彼”が言ったのだ。アイラーが連れていってくれると。

「ひょっとして……」「いや、じゃない？」

ぶるぶるんと、控えめにアイラーが鼻を鳴らすから。

「……やつ」

どつと疲労が押し寄せた。ここにたどり着きさえすれば、それでもかも順調にいくと思つてたのが甘かつた。

だって“彼”は言つたじやないか。『ノルファー』で待つてゐと。

……まさか騙されたのかしら？

あれかい、貴族のお戯れといつヤツか？私はただの暇つぶしだつたのか！？

「ちくしょへつ、弄びやがつて！」

農民ナメやがつて！

誤解を招きそうな台詞を吐きながら、辺りを見回してみた。もしかしたらどこかで私を笑って見物してるかもしない。でも、そんな人物はいつこうに見当たらなかつた。不審な行動は控えよう。おつちやんに怪訝な眼差し向けられたらし。

……そんなわけ、ないよね。騙されてたわけ、ない。

思えば不思議なことだらけだったもの。“彼”と初めて会つたのは いや、正確には会つてはいない。声を『聞いた』だけ。

昨晩、“彼”は私の脳内に勝手に侵入してきて話し出した。しかも私以外の人間には、その声は聞こえていなかつた。おかしいよね、絶対おかしいよね。

どうやつたらそんなことができるの。魔法使いじゃあるまいし。そもそも魔法なんてあるわけもないし。

とにかくノルファーへ向かつことを決めた私に、“彼”が用意してくれたのがアイラーだつた。

もちろん馬一頭は田舎の村の農民である私からしたら、高額すぎて手が出せない貴重な存在。

けど、けどもね。貴族のはずなら馬車かなんかで迎えに来てくれるのかなうなんて、淡い期待もあつたりしたのね。ちょっと夢見ちやう可憐な乙女リズちゃん十八歳、うふ。

やめといひ。気持ち悪すぎて自分で自分を撲殺したくなつた。

でも実際は……馬車なんていらなかつた。アイラーはどんな馬よりも速い足の持ち主だつたからだ。

私の住んでいたフルール村からノルファー・レンまでは馬で三日はかかると聞いていたのに、アイラーはたつた一日弱で到着してしまつた。

常識で考えれば普通じやあ、ない。“彼”もこの黒馬も。
それならば“彼”に会うのも、一筋縄ではいかないのかもしけない。

「疲れたね。それにお腹もすいたし。休もうか、アイラー」

話しかけると、アイラーは穏やかに目を細めた。まるで返事をするみたいに。人語を理解してゐるんだろうか。そんな目で見られると、ドキドキしちゃうよ私。罪なオスだ。

とりあえずは宿探しだ。腹ごしらえをして、情報収集しよう。

“彼”は世の中の枠組みから外れた人だもの、誰か一人くらいは“彼”について何か知つてゐるかもしれない。噂でもなんでもいい。

鳴き始めた腹の虫に責つ付かれながら、私は宿屋の看板を探した。

「女になんていじやんやんですか

どれへりこ歩き回つただひつ。

目的は明確なはずだ。寝泊まつてできる場所が必要だつた。だから宿を訪ねてまわつたところの、何軒断られたことか。

その理由とこりのも、宿屋の店主みんながみんな同じ口上を垂れた。

“よしてくれ、黒い馬なんて！店に疫病神呼び込まれりや困る”

よもやアイラーが宿屋を遠ざけるとは。こんなに素敵な牡馬を見たことがあるのかと、それはもつねちねち問い合わせてみたい。

引き締まつた筋肉が脚線美を際立たせ、均整のとれた体躯はまさに芸術。毛並みは高貴さを感じさせる艶を放ち、黒馬ながら、わりと風に靡く鬚だけはなんと白銀。

神々しいところ葉がこれほどまでにぴつたりな馬が、他にいると思いかー？

とせきつもの、店主たちの言ひ分は真つ当だと思つ。

『黒』はこの世界では忌み嫌われる。黒い動物など尚更だ。人々

は身に付ける物にソノ色を選ぼうとはしないし、牛飼いでさえも生まれた子牛が黒に染まつていれば、泣く泣く処分すると言われてる。

それが当たり前だもの。なんとか門を通してもらえはしたけど、アイラーを連れた私はあちこちから視線の集中砲火をくらつた。

都會つて、苦手かもしけない。田舎者の思考丸だしだけど人が多いと落ち着かない。

「ゆづくつお休み」

ようやく泊めてくれる宿を見つけたのは随分と月が高くなり、夜も深まつた頃だった。馬屋にアイラーを繫ぎ餌を与え、おやすみの挨拶を交わす。知らない街に一人でいるのは心細くて、離れるのは寂しい。

「また明日ね、アイラー。明日こそこそは主人様のところに帰してあげるからね」

この子だつて主人の命を受け、私のここに来てくれたんだ。孤独を感じないはずがない。頬をさすつてやると、アイラーの目元が緩んだ気がした。やっぱり……理解してるんじゃないのかな。人の言葉を。

それから馬屋を出て宿の受付を済ますと、部屋に向かう前に私は店主に話を切りだしてみた。“彼”的居場所を突き止めるために。

「あの、『』らへんで奉公人を募つてゐる貴族がいるはずなんですけど、知りませんか」

「はあ？ そんな話、聞いたこともないねえ」

密の前でもお構いなしに、カウンターに肘をつき酒をぐびぐび煽る中年のおじやんこそがこの安宿の店主であるが、この姿勢からすると店を繁盛させようという気はまったくないらしい。だからこそ泊めてもらえたわけだけだ。

それにしても……本当に何がどうなつてゐるんだろう。“彼”がこの王都に屋敷を構える貴族だといふのなら、あの件が知れ渡つてもおかしくないといふの。

「じゃあ、この辺りに魔法使いがいる……なんて噂があつたりしないですか？」

「ふふふ……」

「ひつと小首を傾げカワイコぶつて次なる質問をしてみたら、おじさんは飲んでた酒を噴き出した。真正面にいた私の顔面に直撃である。酒臭い。

「お嬢ちやん、なんてことを……滅多なことを言つもんじやない！」

「一

私にお口から酒鉄砲をくらわしたことなどなかつたかのよひに並々ならぬ形相で身を乗り出してゐるおじさん。

違つだろ？そこはまず謝るのが人としての道理だらう？『レディに加齢臭たつぱりのお酒ぶつかけてごめんなさい』だら？

言つたくなるのを抑え、といつよりかは言わしてももうべす更には両肩をがつしり掴まれる始末である。ムッとしながらも、このままで汚いので布で顔を拭いておいた。

「いいかい、『魔法使い』だなんて教会の連中が耳にしたら明日にはおまえさん、灰になつちまうだ」

店主のおじさんは一度周囲を見渡してから声を潜めると、そう私は忠告してきた。

「お嬢ちゃん、田舎から出てきたんだろう。だから疎いのかもしかんが気をつけたほうがいい。事情は知らんが異教徒にでもみなされば、火刑は免れん。最近は一層取り締まりが厳しくなつてるからな」

なかなかの迫力をぶつけられ、おじさんが真剣だといふことは伝わってきた。ただ、酒臭い。

それにしてもひらが語りすとも私が田舎者だと見抜かれたといひことは、よつぱり田舎っぽい格好と雰囲気出してるんだろうなあ……。

「まあ……魔法使いかはわからんが、北の森には昔から妙な噂がある。黒い化物を見たとか氣の狂つちまつた男が一人で住んでるとか、そんな話は絶えない。報告を受けて教会は調査団あなかを派遣したが、結局何もなかつたみたいだけどな。しかし 強ち嘘あながでもないのかもしれん」

おじさんはカウンターを越えんばかりに突き出していた体を引つ込み、今度は神妙な顔つきで語るもんだから私はじつと聞き入つていた。

「あの森に入った人間は『まん』といるが、森にいた記憶をなくして帰つてくる者が多いのも事実だ。なんにせよ不気味な場所には違ひない。今じゃ近づこうなんて物好きもいないし、お嬢ちゃんもあの森に行こうなんて考えてんならよした方がいいぜ」

またお酒のボトルに口をつけて晩酌し始めたおじさんだったけど、色々教えてくれたり助言してくれたり案外いい人なのかもしけない。

なのに『めんなさい、おじさん。

私、明日北の森に行つてみます。

これは私の直感でしかないけれど、そこに“彼”がいる気がするの。

私は“彼”にどうしても会わなきゃいけない。

一夜を宿で過ごし、空が白みかけた頃。私はアイラーの背に跨ると、昨日の賑々しさが嘘みたいにひつそりとした王都を後にした。寺院からの始業の鐘も鳴らないうちに頑丈な街門をくぐり、野を駆けてゆく。

田指すは、北の森。

道は知らずともアイラーの足が示す場所がきっと、私の望む場所だと信じてる。時を待たずして陽も田を覚ます。山並みの向こうに、世界の光を見た。

体を冷やす風も幾分かは和らぎ、アイラーの白銀の鬚を踊らせて、ただ綺麗だった。揺れて流れていく景色。草原を越えて、まるで時を駆けていくような、そんな感覚さえ抱くのは秀でて俊足の黒馬の力なんだろうか。

進もう。彼の背に、私のすべてを託して。

太陽が昇りきつて頭上で輝きだした頃にはアイラーは走りを歩みへと移し、激しかった上下の揺れも緩やかなものになつた。

同時に視界も変化をみせ、原っぱを駆けていたはずなのに……いつの間にか鬱蒼とした森に私とアイラーは囲まれていた。

「…………？」

そうだ、きっと。

「」が、この森が、宿屋のおじさんが言つてた“北の森”だ。今までとは空気が段違いだもの。

私よりも遙かに背丈の高い木々が、無限とも思えるほどに森の奥まで続いている。まるで鏡の中に迷い込んだみたいだと、思つた。

なんだか少し肌寒いような気もするし、昼間だといつのに暗い……感じがするのは、人っ子一人いなくてアイラーの蹄の音しかしない静寂の空間がそう錯覚させてるだけなんだろうか。

時折吹く風に葉が擦れ合つて立てる音が悪魔の笑い声のように聞こえて、本当に不気味な森だ。奇妙な噂がたつのも、誰も立ち入りたがらないのもわかる気がした。

森全体が生きてるというか、意志を持つてる。そんな印象を受けた。正直ここにいたくないし、できれば引き返したい。

だけどアイラーは立ち止まらないし、進めば進むほど“彼”に近づいていってるのは確かだと思つ。

弱音を吐くのは早すぎる。怖くても逃げちゃいけない。まだ、会つてもいいんだ。私には守らなきゃいけない、大事な命があるんだから。

それに……この賢い馬が指す道が間違ってるとも思えない。大丈夫、悪魔や魔物なんてこの世にはいない。そうでしょ？大丈夫よりズ！

と自分で自分を励ましていると、不意に黒い物体が右手の茂みから飛び出してきた。

「アーティストの才能を認められるのはうれしいです。」

森に響き渡る、大絶叫。さらには叫びこみたいになつてぐわんぐわん共鳴してゐるけど、そんなことはどうでもいい。

とにかく唐突すぎてしかも気味悪い場所に一人きりでいる不安感から、乙女らしからぬ悲鳴をあげてしまった！

「ん?
猫?」

じめからペ一一へつていたもので、よくよく手をはじめてみねが。

「あれ、もしかしてキリ、一日前に私の家に来た猫ちゃんじゃないの？」

私とアイラーの行く手を阻むかのようだ。真ん前でさよこさんと座つ

ているのは、一匹の黒猫だつた。鋭い目付に、瞳は黄金の月を嵌め込んだような琥珀色。毛も黒く光沢を放ち、艶々だ。

「とにかく高貴さを漂わせるその黒猫こそ、私が故郷の村を出でるむばる遠方の地であるこゝまでやつてきた“理由”。

一昨日の夜この猫が一枚の紙をくわえ、私の生まれ育つたフルーリ村に現れたのだ。その紙に記されていた内容は、誰かが奉公人を必要としているというものだつた。字がある程度しか読めない私は、それ以上詳しいことはわからなかつた。

奉公人を雇うということは裕福な人物に違いないし、貴族だと勝手に思い込んでいた。何だつて良かつたんだ、生きていくためのお金が手に入るなら。貧しい我が家にはどうしても必要な物。

だから、その時頭の中で聞こえた『誰かの声』に導かれるまま、私はフルール村を旅立つた。

「ねえキミ、『彼』はやつぱりこの森にこるのね？」

一昨日の黒猫がいるのだから、きっとそうだ。だつて雇い主の使者だもの。

じつと私の顔を品定めするみたいに見つめてくる黒猫に、少し身を固くしてしまつ。可愛いんだけど目力が凄いわ。

やがて猫は私からアイラーへと眼差しを向け、まるで彼と目で会話をしているようだつた。

何やら確認し終わったのか黒猫は私達に背を見せ、歩き出したのだ。ついてこいと言わんばかりに。アイラーもそれに続く。いよいよ“彼”との対面の時が、迫ってきた。

いいですか、猫は する生物なんです

先導してくれている黒猫のお尻がふりふりしてて可愛い……じゃ
ない。そんなことじゃなくて、何の疑いもなく私はこの猫を村にや
つてきた猫だと思い込んでしまっているけど、冷静になつてみれば
あり得なくはないだろうか。

フルール村から王都ノルファー・レンまではアイラーのおかげで一
日で行けたけど、普通の馬なら三日は必要だ。さらにそこから北の
森まで半日。猫ちゃんが一日前フルール村を尋ねてきて引き返した
としても……アイラー並みの足がなければ、ここに帰つてくるなん
て不可能だ。

この子はあの黒猫じゃない?いや、絶対あの時の猫だ。確たる証
拠はないけれど、私の勘がそう言つてる。猫なのに猫とは思えない
洗練された立ち居振る舞いも、一瞬にして引き込まれてしまう金色
の瞳も、“彼”が遣わした猫以外には持ち合わせてないはず。

アイラーがそうだつたようにこの黒猫も、常識を逸した存在な
かもしねい。そして彼らを使ふとして従わせる“彼”自身も。

『気の狂つちまつた男が一人で住んでるだとか

宿屋のおじさんの言葉が、ふと頭をよぎった。

……か、帰りたくなってきた……かも。

「ひいつー！」

空恐ろしさに思考がネガティブに傾いたのを見抜かれたのか、黒猫が振り返つてギロリと極上の睨みをきかせてくれたので『逃亡』の一文字は捨てた。両肩に鉛の乗つた気分でアイラーの背に揺られ、ひたすら森に行く。

それからのことばは余り覚えてなくて、長かったようにも思えるし、そんなに時間が経つてなかつたようにも思える。とにかく“彼”的もとへ辿り着いたのだと悟つたのは、心地よかつた揺れが止まつたからだつた。

永遠とも思われた樹木の並列する風景が途切れ、私達は陽光満ち溢れる大広場に出た。

息を、呑む。

開けた先に在る光景が余りにも美しくて、余りにも幻想的で。この世の苦痛やしがらみや絶望から解き放たれて、生きることさえも忘れてしまいそうな　それなのにどうして、懐かしささえも覚えるんだろう。

陰鬱な森のなかに、こんな場所があつたなんて。大きな円状の広場は太陽の光を遮るものではなく、明るくて暖かかつた。そして広場中央に聳え立つのは、天まで届きそうな大樹。成人男性十人でも囲めそうにないほどに、幹が太い。見たこともない立派な樹だつた。

そんな神様でも宿つていそうな莊厳な樹に、家がある。……って言つたらおかしな表現になりそつだけど、何て表したらいいのか。家と樹が『融合している』の方が、まだしつくりくるかな。

幹から屋根がひょっこり出ているし窓もあるし、ドアもある。大樹全体が住居になっているといつか。私が気が狂つたんじやないかと思うような光景だ。

それでも先程までの恐怖心が消えたのは、大樹の周りでは色鮮やかな花が咲き乱れ、小鳥が唄い、蝶がひらひらと待つてゐるから。まるでそこだけが聖地であるかのように、穏やかな時間が流れていった。

私はアイラーから降り、草むらに足をつけた。空気は澄み渡り、肺から全身、果ては魂までも浄化してくれてそれで何度も深呼吸を繰り返す。ああ天国……。

「何やつてんだ、早く来いブス」

.....

「へ?今、なんか聞こえた?

.....

「つゝとつしてゐるところに割り込んできたのは、低い男の声だつた。でもここには私とアイラーと黒猫以外に、誰もいない。

「わあわとじい。うるせえんだアイツが」

目が点になるとは、まさに「いつ」ことを指すのかかもしれない。だつて、だつて、喋つてゐる。猫が喋つてゐる。

声の主は、超絶うざつたそつに私を見てゐる黒猫だつた。

え、もしかして本当に天国だつたの？私いつ死んだの？まさかアレ？アレかい？盗賊に追わられてた時点で死んでたの？夢オチとかそんな馬鹿な……

これ以上ないくらいにマヌケ面で立ち尽くす私に、軽蔑を込めた一瞥をくれ、黒猫は大樹へと歩き出した。やはりお尻が可愛い……じゃなくて、オスだつたんだ……でもなくて、意外と声は男らしくてかつこいい、これも違う。もつ意味が分からぬ。

猫は喋るものなのか？そつこつ生き物でしたか？

完全に思考回路がイカれてしまつた私はふらふらと、人語を発する黒猫の後をついていくしかなかつた。大樹の家のドアを器用に開けて中に入つていく彼のオケツを、追う。ほんとに尻好きだな私。獸限定だけど。

館と言つても過言では、ない。それが大樹の中の感想だつた。ふわりと匂つのは、そこかしこに飾られている花のものだらうか。甘くて安らぐ、緑の匂い。そこにこの樹の香りも加わつて、更に館の床や壁の木目が癒しを『えてくれる。

入つてすぐの大広間には机があり、書類やら木の実やらガラス瓶とかが散乱していて乱雑な印象を受けた。内部は外観から想像するよりも遥かに広く、大広間から幾つもの廊下が延びてどこかに繋がっているようだ。

「おい、連れてきたぞバーンハード！」

いきなり黒猫が大声を張り上げるもんだから、忙しなく大広間を観察していた私はひっくり返りそうになつた。

『やかましい』

そして、次にどこからともなく降つてきた声。黒猫のとは別の、声。「人をこきつかつておいて随分な言い方だな」とぼやく猫に、人じやないじやんとはさすがにツッコめなかつた。

落ち着いていて深みのあるこの声を……私は知つてゐる。

『じじ苦労だった。その馬の骨を、私のところまで連れてきてくれるか』

もう一度、姿なき声がする。間違いない。一日前に村で聞いた声だ。私をここまで導いた、『彼』のもの。

しかし『馬の骨』とは、もしや私のことだらうか。馬つてアイラ
ーしかいないけど、アイラーは骨ではないし……。

ぶつぶつ言いながら考え込んでいると、

「いくぞ、バス」

めんどうやうに舌打ちし、黒猫が言い放った。馬の骨だとかブ
スだとか、どうもこの館には無礼者しかいないらしい。

度重なる超常現象に感覚が麻痺したのか、不思議と腹も立たない。
どうでもなれ精神で私は口の悪い黒猫に従い、『彼』のもとへ向
かつた。

皿には皿を、骨には骨を

緩やかな曲線を描く廊下を歩き、幾つもの部屋の前を通り過ぎてようやく黒猫は止まつた。迷路みたいな所だ。大広間からここまで道のりなんて、覚えちゃいない。

「入るぞ」

「ぶつきらぼうに黒猫が目前の部屋の中へと、声をかけた。「どうぞ」と返事が返ってくる。未だに猫が人の言葉を口にしているという事実を受け入れられないものの、彼らは私の胸中など関係なく事を進めていつてしまうのだ。

獅子をモチーフにしたと思われる紋章が刻まれた、一際目を引く豪勢な造りのドアを見る限り、この部屋が館の主である“彼”的部屋であるのは明白だつた。

思いつきりドアに体当たりをくらわす、黒猫。バイーンと弾かれたドアが勢いよく開け放たれた。なんと斬新なことか。こんな乱暴なドアの開け方は初めてだ。でもまあ猫だものね、仕方ないといえば仕方ないのかも。

胸の高鳴りは、最高潮を迎えている。いよいよだ。声だけしか知らなかつた“彼”との、面会の時がきた。私の運命を……握る人。

先に黒猫が足を踏み入れ、一呼吸置いてから私も室内へと進入した。

広々とした部屋の両側に配置された本棚には、ぎっしりと書物が詰まっている。書庫みたいな部屋だ。

その部屋の奥に誰かが、いる。木枠の窓から燐々（せんせん）と入ってくる光が逆光になってしまって、始めはよく見えなかつた。目が慣れてくると徐々に、その人を象る線がはつきりと浮かんでくる。

椅子に腰掛け、足を組んでいる男の人。

「ようこそ、リズ。待っていたよ」

ああ、何だろう

「君ならここへたどり着けると、思っていた」

言葉になんか、できない。

なぜだか胸が締めあげられて、苦しくて、泣きたくなる。どうして？初めて会う人なのに……どうして私……。

“彼”は、ただただ綺麗な男性だった。天から降りてきたんじやないかと思うほどに、人間離れした美しさを備えていた。

顔立ちが整いすぎて逆に怖いくらいで、しかも無表情。愛想笑いなんてしてみせる気配もない。完全に冷めきった目だった。話し方にも抑揚がなくて、半ば棒読みとも取れそうだ。誰かが“彼”的後ろで、腹話術でもしてんじゃないのってくらい。

だけど、私は“彼”的声が好きだった。初めて聞いたときから感じていたこと。

心の隅々までまでじんわりと染み込んでくる、高すぎず、かといって低すぎもしない、安心感を与えてくれる男の人の声。とても落ち着くんだ。

「初めまして……馬の骨です……」

勝手にお口が、自己紹介しだした。確かにこんな人の前じゃ私など、馬の骨。むしろハエのフン。だからって『馬の骨です』って自分で言っちゃう情けなさに涙が出そうだ。

「血り『馬の骨』名乗ってりゃ世話ねえな

と、生意気な黒猫が言った。

なんてこいつた猫にツッコまれてしまつた！これはもう人生の黒歴史として刻まれるレベル。

「あ、いえ、リズです。私の名前

「知つているよ」

慌てて言い直したものの、『彼』はさりと一蹴してくれた。

「どうして……私のこと、知つてるんですか」

一昨日の夜、フルール村で黒猫から受け取った紙に書いてあつた文字が読めなくて、奉公人に志願したくてもどうすればいいかわからず途方に暮れる私に、助け船を出してくれた『彼』。

そのやり方も奇なもので、突如私の頭の中に『彼』は声を流してきた。他の誰にも聞こえないように、私だけに語りかけてきたのだ。まるで 魔法みたいに。

あの時も、『彼』は私を『リズ』と呼んだ。

あれよあれよと話は進み、というか強引に翌朝村を出発させられ、近くまで迎えに来てくれたアイラーに乗つてここまで旅をし、今に至るというわけである。

「私が教える義務はないでしょ。馬の骨なら馬の骨なりに知恵を絞つてみるという手があるが、どうかな？」

しつつと、"彼"はそんなことを口にする。『うつむかず』、
である。

……ふつ。これはいいシンシン真似。じわじわくる腹立たしだ。

「馬の骨とは言いますが、私にも一応リズといつ以前がありまして。
こんななんでも名がある以上、馬の骨にはまつてはならないかと」

「失礼。では敬意を表し『凡骨』とお呼び差し上げよつか」

わーい凡骨に昇格だつ キラッ

じゃない。そんなに骨が好きか。

絞る知恵もないのに反撃に出たのが悪かったのか、またまた骨で
返されてしまつたじやないか。

ああもう、違う。こんな『義なき骨争い』をしてる場合じゃないん
だつてば……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8511t/>

ウルマを追う娘

2011年10月7日20時36分発行